

田舎暮らしの四季

「是がまあつひの栖か雪五尺」とは晩年信濃の故郷に舞い戻った一茶老人の感懐であつたが、平成の濁世に定年を迎えた白髪男が漸く好き勝手しようとして移り住んだのが新潟は能生町の棚田集落、覚悟はしていたものの矢張り驚く事が多い。二年目が済んだ段階でまだこれからが本番だが第一印象は新鮮である。先ず日本列島地図を眺めて人夫々に趣向があるろうが、己の場合挙げた条件は、田んぼそれも棚田がある、魚の捕れる海が近い、茅葺き屋根の家、それに雪が降ること。雪となるとそれは日本海側に限られ、島根から西秋田から北は外す。しかし私腹を肥やした泡ぶく銭があるわけがないから、伝がなければ話は始まらない。で最も肝腎な条件は村人の人情で

あることが分かってきた。結局100%の要求は諦めて後は運と努力に任ずることになった。と言う次第で人生終わりに近付いてから初めての田舎暮らしである。

さて四季の移り変わりだが秋から入ったので、秋冬春夏の順で行く。吉日を選んで入村式を行った。集落は47軒5班に別れその所属の隣人が集まり囲炉裏を囲んで夕方まで酒盛り団欒。これは地域に参入する不可欠行事と考える。秋の天候は日本各地大差はなく、先ずは実りの稲刈りが始まる。今の身分は住まひは別荘番、田畑は小作人だから、プロに混じって手伝う。処がこれが天気の具合で地獄極楽の差が生じる。良い場合小型刈り入れ機に二人取付き、私は周囲の二列分を鎌で刈る。

刈る端から初にして一段分を二時間で終り、肥料も農薬もなしで五俵収穫があつた。何だこれは楽だと思つたら次の年は台風の余波が襲つて総倒れの無残な有様。泥に浸かつた穂は芽が出て仕舞うし、近所の助人を頼んで五人掛かりで手刈りで丸二日、更に運んで稲架に懸けて、長靴は潜るし腰は抜けたようだし死ぬ思いであつた。村人はこれを当然と受け入れて来たので、天地を祭り田んぼの神様に祈る気持ち自然だと分かる。村は兼業が殆どで農作業は土日の片手間になっているが、自家分は昔ながら天日に干して、近頃高価な魚沼産米より抜群に美味しい。何者にも代え難い世界に冠たる日本の文化である。昨年は赤米を少々作つたが、収量は少ないものの風には強く作り易い餅米であつた。一族なら一段はいらぬ、米さえあれば銀行も警察も高速道路もロケットも無用、何時から日本は可怪しくなつて仕舞つたのだろう。

十二月半ば待望の雪が来る。但し雪が風流と言つてはならぬと口止めされる。一月二月が正念場、何故ならこれを乗り切らねば田舎暮らしは出来ない。海岸から2キロ弱だが豪雪地帯に近く、海面は濼々と湯気が湧きこれが粉雪となつて漕々と降り積もる。一晚に80センチで遂には屋根から地面に繋がる。此処で雪を切らないと軒を潰すことになると言ふ。当然座敷の気温は零度、風呂の湯沸し器は凍つて、外出叶わねばパソコンとはいかない。仕事ができるのは10度迄、書き物が6度、読書が3度が限度、零度では凡て気力を失うこ

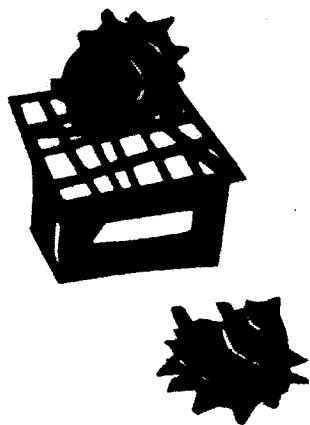
とを悟る。無論近所は皆石油をガンガン焚いて暖かく暮らす。さてどの程度するかまだ決め兼ねている。雪の朝庭先には狸と兎の足跡が点々と続いて嬉しくなる。ある日拳大の跡を見て隣の婆様に鑑定して貰ったら知らぬと、証写真真を鉄砲打ちに見せたら狐のボスである。この谷間を一匹縄張りにして、教えて心配したが狐は保護獣だから大丈夫のこと。二月は農閑期で雪中運動会があるので出席すると、老若男女七十名総出で公民館の二階で色々のゲーム、輪投げ、紙切り、酒早飲み、新聞紙玉入れ等を競う。後は豚汁で宴会。集落の店は酒屋一軒のみ、何かと言うと飲み会が多い。ただ囲炉裏を残す家はわが家を含めて二、三軒のみとなり、遊びの場を提供するようになりそうだ。

雪が融けたら藪の藪から始まって山菜の季節、たちの芽はスーパの養殖とは異なり天麩羅にすれば皿に山盛り、山独活は白いひよるひよるとは大違い遅しく寒い香味、天然山葵は漬ける秘訣があつて辛みが絶品、屋敷裏には良菜別名うわばみ草が群生して不自由しない。夫々に名人がいて自然薯など一メートルのくねくねした奴を摺れば精が強くて摺粉木が回せない程である。どれも都会では忘れ去った山の幸。此処でも県が山菜泥棒用道路を造るから安心はできぬ。さて遊んでばかりいられない、田起こしから田植えまで営々と作業が続く。二千年間先人が受け継いで来た物凄く精妙な高度な技術体系なのである。生態系を無視した機械化、化学化企業農法な

ど野蚕の一語に尽きる。田植えの私の役は植え残った処を手植えするのだが、足が埋まってエネルギーの九割が歩くのに使うと言った案配である。労が大きいのは事実だから能率の方は勘弁して貰う。畑もしたいと草を焼き、大豆を蒔いた。通り掛かった婆様たちが鳥が見ているから駄目だよと親切に教えて呉れたが今更止める訳にもいかず続けたら、芽が出ました。暫く放つて置いて来て見ると一面草茫茫、草を巻くと豆の畑が姿を現して嬉しかった。大地の恵みで結局宴会十回分の枝豆が収穫できた。畑は毎日手入れしなければならぬので今後の宿題である。

山の草木が芽吹いたと思つたらどんどん緑が濃くなつて、季節の移り変わりは目を見張るばかりである。日本人の機敏さや繊細さや感性は自然の多様性によって養われたことは疑う余地はない。それを全国一律のビルだ車だ山川を潰した拳句密室冷暖房そして知識の元とは品性下劣なタレントの俗悪テレビ番組、幾ら優秀な遺伝子を授かつていても背任、殺人、詐欺、人非人が蔓延するのを防げまい。あの戦争にもバブル崩壊にも何とか残した自然と人情を惜しむ気持ちが一層ある。風呂で蛙の合唱を聞き、坂道で蝮に道を譲り、竹藪で平家蛸を追う楽しみは只と云うこと。世上経済万能の価値観は疑問に思えてならない。夏の娯楽は鏡の如き日本海、海に波があるとは太平洋側の偏見、そこで三十年振りの海水浴となったが、紫の絹の褌をしたら子供たちに笑われた。早く双子の孫に海を見せる

必要があろう。海と言えは海の幸、矢張り名人が居てじゃあ一寸と二時間程居なくなつたと思つたら箱に一杯栄螺を採つて来た。早速壺焼きだが店で出るのは桁が違ふ。鱈鍋、鯨鍋、鴨鍋も随時催すが、それもこれも仲間が居ての話。だから今年は愈々待望の窯を築き茶碗を焼いて少しでも交流を図る積り。先日の火入れ式には神主を招き餅を搗いて三十人が参列して呉れて嬉しかった。日本はまだ大丈夫のような気がする。欲を言えば条件の中近くに温泉がないことが画竜点睛を欠いている。一段落したら温泉を掘るのが夢と言う次第。兎に角歳は容赦なく取るから年寄りの冷や水どこ迄行けるやら。



加藤龍夫

1929年福岡県小倉市に生まれる

横浜国立大学 名誉教授

昭和34年より東京都立大学、富山大学、横浜国立大学に

おいて環境科学の調査、研究に従事し、農業、自動車排

気ガス、ダイオキシン汚染等の問題解決に尽くす

著書に「農業と環境破壊56話」「麦と米の攻防」